



皆龍寺報 とびら

2023年1月1日(月)発行
 第44号
 真宗大谷派 皆龍寺
 山形市門伝100
 TEL 023(643)3037
 kairyuji.monden@gmail.com
 https://kairyuji.mydns.jp

顔も見ることができません。もちろん、お寺の行事は仏法を聞くという法話も大切ですが、私はこの「お齋」ということの意味も大事なのではないかと感じさせられました。

二十一世紀という時代 (十八)

「寄り添う」ということ

コロナウイルスが流行して早四年。私たちはそれに慣れ親しんだと申しますか、あまり恐ろしさを感じなくなってきました。ワクチンの開発や対処方法もわかってきたので注意さえしておけば大丈夫のように感じてまいりました。

昨年、久しぶりの報恩講を開催いたしました。しかしお齋は用心のため弁当にいたしました。私もいろんなお寺さんに呼ばれて行きましたが、ほとんどお弁当でした。

その控室で、お齋について話をしております。心に残ったのは、昔は寄り合いの場所だったんだね。「○○ちゃんが来てないけど何したんだべえ」などと言って年に一度(あるいは二度)の出会いを確かめ楽しんでいただね、という話でした。

この現代では、電話もありますしビデオ通話も出て来て顔を見ながら話ができるようになってきました。会おうと思えばいつでも声は聴けるし、顔も見ることができません。

私たち人間は、何をもって他の生き物にお返しするのでしょうか。人間同士は返礼品を贈りますが、他の生き物にも返礼すべきではないでしょうか。農家の方々は、サクランボの木に、「お礼追肥」をするそうです。その心、素敵ですね。(住職記)

今年こそ、平和で安らかな年でありますように

それは、人と人が寄り合うということです。「寄り合う」ということは近寄ることです。近寄るということは寄り添うということでしょう。もちろん電話で話し合うとか、リモートで顔を見ながら語り合う、ということもだめだというのはありません。これは「近寄ることができないから、せめて電話でも」ということでしょう。どこまでも機械というのは私たちのできない部分の補いだと思えます。

地球上の生き物はすべて寄り添いながら生きていくのではないかと思います。他の命をいただいで自分や他の植物を生かしている植物たち。他の命をいただいで生きる動物たちもまた自らの命を他に与えます。

2024年 皆龍寺行事年間行事	
(まだ注意は要しますが、できるだけ復活させたいと思っています。)	
1月25日(11時~13時)	おやすみ
3月25日(11時~13時)	
4月13日(10時~12時)	永代経 【お当番(お手伝い) 新屋敷・柏倉組】
5月25日(10時~12時)	お講 お齋なしの茶話会
6月25日(10時~12時)	お講 お齋なしの茶話会
7月25日(10時~12時)	お講 お齋なしの茶話会
8月13~15日	盂蘭盆会
9月25日(10時~12時)	お講 お齋なしの茶話会
10月25日(10時~12時)	お講 お齋なしの茶話会
11月13日(10時~15時)	報恩講 【お当番(お手伝い) 悪戸組】
11月 ~ 12月	お取越 (実施したいと思います)
12月31日	除夜の鐘 修正会

後記

円安物価高が落ち着いてから長年使っていた相棒のノートパソコンが不調で、とうとう買い替えになってしまった。「貯金をする」ということは日本に投資をしている事と同じだということを忘れてはいけない」ある投資家の言葉が身に染みている。経済を学んでみると、金、貨幣、外貨、原油、株式、人、国家、仮想通貨と様々なものが相互に影響しあっていることを実感する。世界に無関心ではいられない。自分が大事だからこそ他に目を向ける必要がある。仏教では自利利他円満というが、利他があつてこそ自利が成り立つのではないかと思わされた。

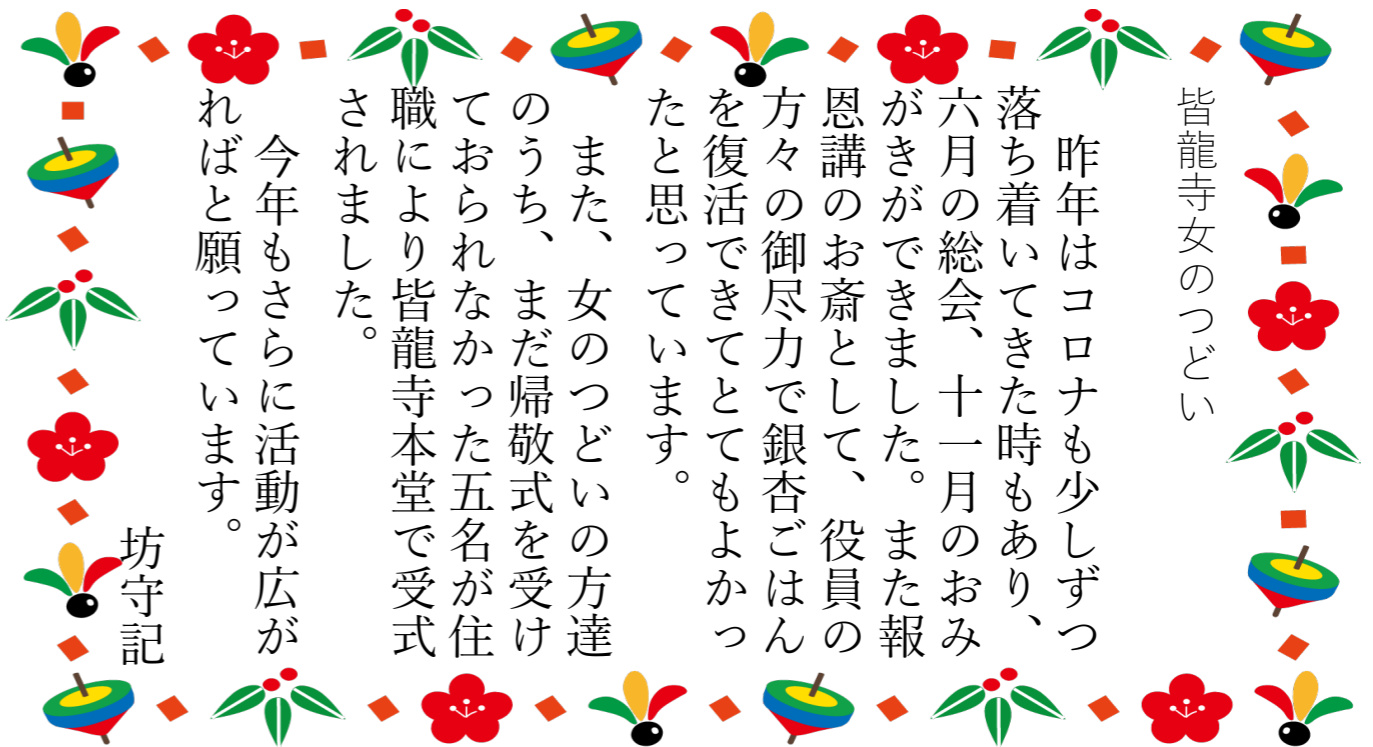
副住職記

皆龍寺サンガスクール

昨年は親鸞聖人御誕生八五〇年立教開宗八〇〇年慶讃法要の行事として「子供のつどい in 東本願寺」が五月五日に京都の本山で開催されました。私達の人生に迷い苦しんだ時、浄土真宗に尋ねていく道を開いてくださった親鸞聖人に感謝し、その誕生を讃える儀式の慶讃法要に参拝することを目的として、皆龍寺サンガスクールでは小学生から大学生、引率と計十六名のメンバーで参加しました。前日は本山内の同朋会館に泊まり、当日は、まだ帰敬式を受けていない八名が受式し、勤行では中一が父と調声、中二の三人が御文を拝読、中一の一人が「ちかいのことば」を述べました。(全国にネット配信されました)その後、

本山の境内では、各地から上山したお坊さん達がそれぞれ教区毎にブースを立ち上げ、みんなを楽しませてくださいました。参加した一人ひとりが心に深く残り、楽しんでいく様子でした。

坊守記



皆龍寺女のつどい

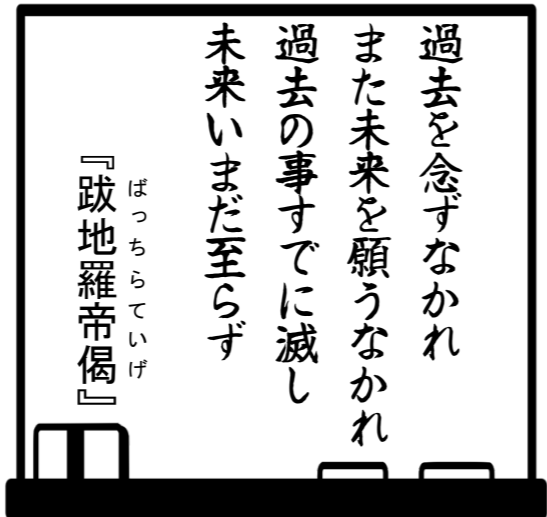
昨年はコロナも少しずつ落ち着いてきた時もあり、六月の総会、十一月のおみがぎができました。また報恩講のお齋として、役員の方々の御尽力で银杏ごはんを復活できてとてもよかったです。と思っています。

また、女のつどいの方達のうち、まだ帰敬式を受けておられなかった五名が住職により皆龍寺本堂で受式されました。

今年もさらに活動が広がればと願っています。

坊守記

法語黑板



過去を念ずなかれ
また未来を願うなかれ
過去の事すでに滅し
未来いまだ至らず

ばっちらていげ
『跋地羅帝偈』

お釈迦様が、弟子たちに禅や瞑想の心得を説く一節です。過去はもう過ぎ去ったことなのであれこれ考える必要もないし、未来はまだ来てないので心配する必要はない。とても単純なことですが、なぜこんなに難しいのでしょうか。過去を反省し、未来を心配する、生きて行く上で大切なことですが、過剰になれば、過去を引きずり、未来が不安になってしまいます。

副住職記

真宗の教え(22)

親鸞聖人の書かれた書物の中で中心になるのは『教行信証』という書物です。この中に

「信に二種ある。一つには道ありと信ずる、二つには得者を信ずる。この人の信心、ただ道ありとだけ信じて、すべて得道の人ありと信じない。これは信がまだ得られていないことだ」という言葉があります。

これは宗教の教えを聞いて信じたとしても、その教えを実現された人がおられるということを感じる事ができないならば、あなたの信心は不完全である、ということでしょう。

そもそも信仰というものは全く個人的なものに相違ありません。しかしながら個人的だからと言って、その宗教に心から領いた人がいるかどうか、それが大事なことである、ということをお教えているのでしょうか。

お釈迦様は、私たちを「善友」と呼んでくださり、法然上人は「法の友」と言ってくださったり、親鸞聖人は「御同朋」と呼んでくださっております。

「得道の人」とは、そういう姿勢の方々なのでしよう。

現代、カルト宗教の問題が起こってきていました。それらは、熱烈な信者がおりました、勧誘されていきました。しかし、その方々は本当に得道の人なのでしようか。

またこうも述べられています。

「また信に二種ある。一つは聞より生ずる。二つには思より生ずる。この人の信心、聞いたことだけを信じて、自分の心の中で思惟して信が生まれてくることではない。これは信がまだ得られていないことだ」

信仰というものは、聞いたことを鵜呑みにするのではなく、自分の心の中で正しく考えて生まれてくる信心でなければならぬことを戒めてくださっているとあります。